



握集落の幸蔵さんとムツエさんは、この春で九十歳になった。握集落は電気が通ったのが遅かったほどの山の中だが、昔は分校もあったのである。

二人は同級生で、一年生の時からいっしょに勉強もし、よく遊んだ仲だった。ムツエさんの家は、幸蔵さんの家から三軒下にあったが、たかだか百メートルとはなれていなかった。だから、正確に言えば、小学校に入る前から遊んでいた。

二人は二十の時に結婚した。それから三人の子どもをもうけ、握集落のもっと奥にある山の田畑で、米やタバコやりんごを作った。子どもたちは成長すると家をはなれていった。

タバコはずいぶん前にやめたが、今では米作りもやめ、

りんごの木もほとんど倒してしまった。さっぱりと、りんごもすべてやめてしまうはずだったが、ムツエさんが、孫に送るりんごを残してほしいと懇願した。それで、五本だけふじのりんごの木が残った。

数えてみれば、いっしょになって七十年である。過ぎてしまえば、お互いにアツという間の時間だったようにも思えるが、年をとったことだけは事実だった。

ムツエさんの最近の楽しみといえば、きんぎょだった。

家のわきには古木のあかすももの木が一本ある。まだ花がさいて一カ月ほどだろうが、あずきつぶぐらいの実をつけた。熟しても、小つぶのすもものは、すっぱくて目の玉が頭の奥にひっこみそうになる。その木の下には畳三枚ほどの池があって、きんぎょが泳いでいた。